

テサロニケ人への

第一の手紙の勉強(三)

宇野輝

パウロは、獄に捕われた時、讚美の祈を捧げた。(使徒・十六・二五)。衣食もなく、餓えて寒さに凍える夜は、鞭打たれた傷跡は疼いて眠ることすらできなかった。そのとき、パウロは告白することができた。「私はイエスのステグマ(奴隷であることの烙印)を身におびたるなり」と。又「もはやわれ生くるにあらざ、キリスト我が内にありて生くるなり」と。(ガラテヤ六・一七。同二・二〇)。生死一切をあげてゆだねた、イエスキリストの奴隷たることは、パウロの感恩の誇であつた。

ユダヤ教徒達からは、会堂荒しの分裂屋、背教瀆神の偽ラビと罵られて、執協な迫害の追跡を受けた。(使徒十三・四二・四三・四四)。第三回伝道旅行でルステラに於ては、迫害をのがれるパウロ等を追跡してきた、ピシデヤのアンテオケ、更にイコニオムのユダヤ教徒に群衆も加はつて、石打ちのリンチを加えた。

彼等は死んでしまったと思つたパウロを町の外に引ずり出して捨てた。しかしパウロは死ななかつた。息を吹返したパウロは、起きあがると再び町にはいった。しかも翌日には、昨日迄受けてきた迫害の嵐の路を再びとつて返し、信者達の信仰を堅めて歩いた。若しも難を避けようと思えば、ルステラからキリキヤの門を通つて故郷タルソに出る路もあつた。

読み返すたびに壯絶、不屈の使命感に身の引緊まる思いがする。

註、一般に城壁や土塀に囲まれていた中近東の町は、門の内側が広場となり、広場には市場がたち、町の長老達や司法者により裁判が行はれた。パウロの場合はユダヤ教徒達と群衆による私刑であつたらう。私達はまた、コリント下十一・二三と使徒九・二三で、ダマスコで城門を堅める迫害者を逃れて「籠で窓より石垣伝いに縋りおろされ」るパウロを読む。これもユダヤ教徒達が、パリサイ派の裏切者であるパウロの命を狙つて、「放浪のアラビヤ人の族長をやとつて待ち伏せさせた」のであらう(デベリウス・パウロ p 63)。

パリサイ派の人々からは、恐らくパウロは「裏切り者の面汚し」として、律法棄却の背教者として、彼の生命は危険にさらされた。使徒・二〇・五のパウロの急な旅程変更はユダヤ人の刺客の隠謀あるが判明してか(ブルース・使徒行伝 p 122)。使徒行伝二三章一・二・一五も刺客の待伏せ。町から町へ！、会堂から会堂へ！、パウロの伝道の執拗なまでの迫害のこの図式は、切迫した審判と再臨の期を前にして、己むに己まれず、福音の証に立つ者が「一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい」にも反映するものであらう。但し独りパウロに限らなかつたであらう。(マタイ十・二三)。

然し、パウロは屈しなかつた。

「我は福音を恥とせず」「もし福音を宣べ伝えずば、我はわざわいなる哉」(ロマ・一・一六。コリント上九・一六B)。

唯、前進あるのみ。

彼の贖い主イエス様が、「牝鶏のひなを」かばう愛の故に十字架のエルサレムに向つて、前進をつづけ給うた如く、今、パウロは、その十字架の恩寵にからめられて、エルサレムから、地中海の波濤をこえて、帝国の主都ローマに福音を伝えんことを望むのである(ルカ・十三・三三。ロマ・十五・二四―二五)。

「しかし、わたしたちは、この宝を土の器の中に持つている。その測り知れない力は神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰らない。迫害に合つても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」。ことを、福音の戦の中に実証したパウロはまた、「それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」。と告白することができた。(コリント下・十二・九B―十)。

(四) ユダヤ教徒と偽兄弟

パウロが福音を伝えるに当つて、彼を苦しめた相手が誰であるかを知つて聖書を読むことは、彼の手紙を理解するうえで大切だと思う。とは言つても私自身もこのことに気付いて手紙を読みはじめて、未だに明確でない場合が多いのであるが。

第一は、彼が福音を伝えるうえで、神の言葉の畑とし、手がかりとした会堂のユダヤ教徒である。パウロはこれら諸会堂におとづれる多くのユダヤ教徒の巡回伝道者の一人として迎えられ、奨励や説教を求められた。パウロは聖書(七〇人訳、ギリシヤ語訳)にもとづいて(行伝十七・二。十八・二八)イエス様こそ聖書に約束せられたキリスト(メシヤ)であることを説得したのである。その説教の(これは彼の築いたコリント教会にあてたもので、ユダヤ教の会堂ではないが)内容の代表的縮図が、コリント上の十五・三―八にあり、その反復説得が二二―二八にある。ユダヤ教徒の中でも、真面目で、熱心なパリサイ派の人々の信仰内容には、聖霊、天使、メシヤ、復活、世の終りの審判等が信ぜられていた(行伝二四・六―八)。

註、これは後にもう一度のべるが、今日、ユダヤ教徒の間で、イエスが新しい教をのべた一人の予言者として認められているのである。然し十字架の罪の贖につきたまいし神の御独子、それから起る復活信仰、それにつらなる再臨信仰。己の義ではなくして、全き恩恵の神の義による救への信仰¹¹回心¹²こういう明確な回心の信仰なしに、初代エルサレム教会内に次第になだれこんで勢力を握るに至つた(恐らくパリサイ派の)人々が、十字架の赦しの義に立つ、パウロの築いた教会に這入りこんで、モーセの律法と民族的慣習割礼等を救の条件として持込んで、福音を乱したのである。即ち「偽兄弟」である。「悪しき働き人」である。(コリント下・十一・二六。ガラテヤ二・四。コリント下十一・十三。ピリピ三・二)。

しかし、ナザレの田舎大工であり、サンヘドリン(エルサレムにある最高宗法院)で、瀆神死刑の判決を受けて、更にロマ帝国に対する治安上の反逆者として、総督に引渡されて十字架にかけられた者が、彼等民族の望望したメシヤである杯とは、彼等の信仰侮辱も甚しい説教であつた。会堂のユダヤ教徒にとって、イエスが異端のラビであつた如く、パウロも、会堂の信仰を乱す異端の偽説教者であつた。すなわちパウロの「十字架はユダヤ人にはつまづきであり、異邦人には愚かだ」あつた(コリント上・一・二三。行伝十七・二三)。然し人は元来(聖霊に感ぜざれば「イエスは主なり」と言うことはできないのである)コリント上・十二・三)。こうして、会堂で二度、三度、聖書にもとづいて証しと奨励をするうちに、聖霊の働によつて、ある人々が、パウロの語るみことばに捕えられるのである。一方、ユダヤ教の伝統宗教に禍いされて、律法の己が義を固執する「うなじこわく、心にも耳にも、割礼なき」(行伝七・五一)人々は、はじめは、パウロの説教を少しく毛色の違つた証しと奨励をするラビ位に思つて、きいていたが、モーセの律法がイエスに於て完成した杯ときいて、次第にけしからん瀆神異説を弄する偽ラビ、パウロと気付いて、怒に燃え立ち、やがて、会堂と町からパウロを追出すのである。

しかし、その時には、信じた人々と共に、更に会堂を中心に、ユダヤ教徒の真面目な礼拝と、道徳的日常生活に心をよせていた、ギリシヤ人で「神を敬う人々」が(彼等はユダヤ教の民族的誠律慣習に重荷を感じていた人々であるだけに)パウロに従つて、会堂から分蜂してゆくのである。そしてそれは多くの場合「家の集会」であり、時には、その家が、会堂と隣りあわせであつ

たこともある。又、会堂司が信者になつてしまつたコリントのよな場合すらあつた。(行伝十八・五一八)。

このことは、ユダヤ教徒の側からみれば、確かに、憎むべき会堂荒し(彼等が嘗々と努力し、伝道してきた会堂であるだけに)の瀆神説教を弄する偽ラビ、(若しも彼等が、割礼不要、律法はついに人を救はない等の言葉を耳にしたとすれば)パウロはモーセ律法の違反者と見做され、会堂追放はもとより、鞭刑に値し、こと信仰に関しては、生命をかけることもいとわないうダヤ教徒の烈しい憎しみをかい、執拗な反撃の迫害は、むしろ当然である。この迫害は彼等の信仰にもとづくのであつて(ヨハネ福音・十六・二)、且ての日、回心前のパウロの聖徒迫害の姿と同じである(行伝・九・一一三。コリント上・十五・九。ピリピ・三・六)。

パウロは、且ては聖徒達の激しい迫害者として、荒れ狂つた自分の姿に、口を塵につけつつ、今、且ての同信徒パリサイ人から、裏切者と罵られつつ、迫害する人々を許すことができたであろう(ガラテヤ・一・十三)。

長い福音の戦いの後期に、コリント教会の人々と信仰における和解と平安の三カ月を過ぎたパウロは、ローマ人への手紙を口述しつつ、(紀元五八年頃)、且て回心前の自らの姿を、鏡にかけられる如き疼きを感じつつ、パウロを迫害する己が同胞ユダヤ人の救に熱い祈を捧げるのである(ローマ・九・一一五)。

更に「兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼等のために神にささげる祈は、彼等が教われることである。わたしは、彼等が神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識(奥義 || 筆者)によるものではない。なぜなら、彼等は神の義を知らな

いで、自分の義を立てようと努め、神の義(十字架)に示された義(筆者)に従わないからである。キリストは、すべて信ずる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである(ローマ・十・一四)と。

偽兄弟、悪しき働き人達に対して。

ユダヤ教の会堂(シナゴク)に於ける、福音の証しのために奮い立つパウロの戦が、「神のためには要塞を破壊するほどの力ある」(コリント下・十・四) 攻撃面であるなら、彼が涙と血の滲む思いで築いた集会内に入りこんで来る律法主義クリスチャン共の策動(ことにエルサレム母教会の権威をかさに着て、或はその有力者からの推薦状を貰って、入りこむ偽兄弟、悪しき働き人共)は、攻撃面にも勝つて、パウロをして、苦悩にみちた激しい戦を強いた防衛面であった。

私達は、パウロの手紙のいづれを見ても、(ピリピ人の集会に宛てた、信頼と喜びに盗れた「屋のようにこの世に輝いている」信仰の集会は別として 二・十五) その冒頭に、彼が「召された使徒」であることの権威を高く掲げているのを見る。これはパウロの戦斗旗である。割礼問題の本質をめぐって、自由の福音か! 律法の奴隷への逆転か! 二者択一を激しく迫ったガラテヤ書の冒頭はことにいちじるしい。

パウロが、ユダヤ教の会堂荒しと罵られ、鞭打たれつつも、兄弟達を律法の奴隷から解き放つて、キリストに捧げた集会(まさに生命がけの愛をもって築いた彼のエクレシヤ内に、再び、こんどは、主の働き人と称する律法主義の偽兄弟共が潜入して、愛する兄弟聖徒達の信仰を逆転せしめんと策動するのである。曰く

「人は割礼を受けずば救われず」と。燃ゆる愛より噴き出す渾身の聖憤をぶちまけて、書き送ったガラテヤ人への手紙こそは、「人は信仰のみによりて救われる、この自由の『わが福音』、十字架福音の本質を吐露した、パウロの熱涙の戦の大文字なのである(ガラテヤ六・十一―十四)。私達は、パウロが、まさに腹背に迫るサタン共との決闘をみるとき、律法というものが、如何に根強く人間の道徳的自立心を好餌に使って、サタンがガンジガラメに働きかけて来るか、「性来の間人は、生れながらのカソリックである」かを知るのである(ソーム・教会史―カトリシズム)。

パウロのこの怒りは、愛してみなければ解らない。パウロの、このサタンの誘惑に対する警戒心は愛する者の上に常に鋭い(ピリピ三・二―三)。パウロの使徒職に対して中傷を加える輩は、この策動者共である。

パウロの福音の自由に立つ立場を鮮明ならしめるため、今、その背景を少しく勉強してみようと思う。

註、尚このことに関して、水無誌五七号の「パウロの募金の愛とその歴史的背景」拙稿を参考して頂ければ幸。

註、パウロの戦った福音の戦に於て、先に指摘した三つの問題、割礼、食肉、異教徒との交り等は、いずれもユダヤ教の下に於ける問題で、エルサレムに近いほど厳しい戦がみられる。遠ざかるに従って、異教の宗教と、その影響下にみられる道徳的頹廢の潔正、又時にローマの官権との衝突等がみられる。

エレミヤ書ノート (二)

野本和幸

二、エレミヤの召命

今回は、エレミヤ書第一章について、学んでみたいと思います。(1)エレミヤが予言者としての召命をうけたのは、紀元前六二七年二十三才頃といわれています。彼はアナトテの祭司ヒルキヤの子であると記されていますが、彼が祭司の家庭に育ったということは、神から後年「君の兄弟や君の父の家の者たちも、君を裏切り、君に対して陰謀を企てている。彼らが君に親しげに語っても、彼らを信じてはならない」(十二章六節。以下訳文は、関根正雄訳による)と告げ知らされ、かつ彼自身も「各々その友に気をつけよ、兄弟を皆信じてはならぬ。総ての兄弟はヤコブの欺きを繰り返し、総ての友はその友を中傷する」(九章三節)と、悲痛にも叫ばざるをえなかったことから推し量られるように、牧歌的な幸福を意味するどころか、骨肉の辛い斗いを意味しておりました。恐らくは家庭において満たされることのなかったエレミヤが、その孤独を慰め、自らの友としたアナトテ近辺の自然は、しかし、実に荒寥寂漠たるものであったことについては、藤井先生の心に泌みるような描写があります(藤井武全集二巻二四四頁)。

(2)さてエレミヤ召命の記事は、エレミヤ書の中でも特別の地位を占めているといえます。それがエレミヤ書巻頭におかれているのは、単に召命経験が時間的に予言者の生涯の始めにあつたからだという事に尽きるとは思われません。

エレミヤの生涯への神の介入、神との人格的な出会いこそが、実に彼の全予言活動の出発点であり土台なのであり、予言者自身の生涯にとつては勿論、彼の聴衆、読者にとつても、それは決定的な出来事だからであります。「予言者は、人間的な理念や計画をたずさえて登場する改革者ではなく、神によつて、これまでの生活から呼び出され、神のための職務や使命へと召された神の人なのであります」(ワイザー「エレミヤ書」(ATD)二頁)。

(3)そのことを、一章五節は、エレミヤの選び・予定・聖別ということで具体的に語っています。ここに、「創造」「選み」「新生」の三要素からなる「聖別」ということが示されているという浅野先生の説を紹介しましょう(浅野順一「真実―予言者エレミヤ―」十三頁―十九頁)。

即ち(一)「君を母の胎につくる前に」といわれている「つく」ということは、神による創造、つまり神なくして人間はありえないということを意味します。

(二)また、神が「わたしは君を知った」といわれているが、「知る」とは「選み」ということであり、そもそも旧約聖書では人間自身も神の選みにより存在しているとみなされているので、人間が神により創造されたということも、特別なものとして神に選ばれたということの意味します。

(三) エレミヤは「予言者として君をたてた」と告げられていますが、神に召されるということは、全く新しい出発であります。人間の生命が、その最も奥深い内側から新しくされるといふこと、即ち「新生」を意味します。「聖別とは、このように、神に造られた自分を知り、その自分は神に選ばれた自分であることを知り、新しい生命にあゆむべき自分を知ることである」(浅野、前掲書、十七〜十八頁)。

かくて、神は召命の言葉をもつて、エレミヤの生涯の中へ喰い込んだのであります。神の言は、エレミヤをしてこの地上的あり方の限界をつき破らせ、神の永逮の予定の深みに、既に固く据えられている自らの礎を掘りおこさせるのであります。

神による「聖別」ということは「元来、無罪ということとは無関係であります。それはむしろありきたりの生活連関から引き抜かれることであり、神との特別な関係へと組み入れられることを意味するのです」(ワイザー、前掲書、五頁)。

(4) 神はエレミヤを万国の予言者、「多くの国民の為に予言者としてたてた」(五節)といわれます。このような神の召命に接して、エレミヤは、実にエレミヤらしい反応を示しました。

エレミヤは、内気で臆病な多感な若者であり、エリアの烈火の如き戦斗精神や、イザヤの王者の如き風格から程遠い、柔らかな氣質の持主でした。召命は先ずエレミヤをして、自分自身の中での分裂、自分自身との困難な闘いをもたらしたのでした。

神の言は、なんとという負い切れぬ重荷を自分に負わせようとするのだろうか。苦悶の余り神から召されたことを嘆息し、神の命令を免れたいというのが、エレミヤの最初の反応でした。

「あゝ、主ヤハウェよ、ごらんの通りわたしは弱輩で、人前で語ることを知りません」(六節)。エレミヤは、自らの存在が弱少にして無に等しきことをよく目覚していたが故に、必死で神の召命から逃げ出そうとしたのでした。誠に彼は「神の前にも人の前にもその存在自身の低い人」(関根正雄「エレミヤ書注解」十三頁)でありました。

しかし「己れの無に拘泥する時、彼は 真に無でないことを示している」(関根、同頁)。

こうしてエレミヤはその後の生涯においてもしばしば、神の前からのがれたいと願い、「微妙な意味で絶えず神に反抗した人であるが、その姿がすでにここに出ているということが出来よう」

(同)と関根先生が深く指摘されるとおりであります。またその故にこそ、エレミヤは、旧約の歴史の中で、心は「万物よりも偽るもの」(十七章八節) 罪は「鉄の筆、金剛石の尖をもって記されたもの」(同一節) といった如き、比類なく深い罪の自覚をもたざるをえなかつた予言者でありました。

(5) 「エレミヤは、予言者としても信仰者としても、決して英雄ではなかつた。召命はここで自己の小きさに拘泥するものを叩きつぶして始まる」(関根、同頁)。ヤハウェはいわれる弱輩だから

といつてはいけない。わたしが遺わすところへ行き、命ぜられた
総てのことを君は語りなさい」(七節)。

藤井先生は息つく暇も与えぬように注釈される。「この言は矢の
ようにエレミヤの心臓を射た。『私はまだ子供だから』などと微
慢にも、その私が何であるか。自分を問題にして何にするつもり
か。もし私が子供でなかったらどうなのだ。私などは何であった
とて少しも関係ない。すべては神にある。私はただ神が往けと示
したまう所へ行きさえすればよいのだ。ただ神が語れと命じたま
う事を語りさえすればよいのだ」(藤井、前掲書二四六頁)。

エレミヤのみならず私達の存立の基盤を揺がす爆裂的な言であ
ります。

かくて、エレミヤは、召命をイザヤのような自発的な応答では
なく「むしろ打ちのめされた姿」(関根、前掲書十四頁)で受けた
のであります。この予言者の姿に、私達は、神がどのようににし
て、この引込み思案で、一見全く不適任とみえる人間を、神の民
の歴史上、最も困難な時のために選び出し、彼を造りかえ、新し
く立たしめるかという生きた実例を見るのであります。

どのようにして、彼は造りかえられるのか。「神は、予言者を
服従へと強制し、服従を通じて自らの不安を乗り越えさせること
によつて、予言者の抵抗を克服する。思想や認識によつてではな
くて、服従という行為によつて、内気から自由への、つまり己れ
からそして人間からの自由への途が開ける」(ワイザー、前掲書七

頁)のであります。神は先ず、端的に、無条件に、信頼と服従と
を要求されます。

しかし、神に全面的に依り頼む者は、神に見棄てられることは
ありません。それは、前途に困難がないとか、困難を神が軽減し
てくれるというのではありません。その反対に、エレミヤには、
艱難はいや増して襲いかかるでしょうし、彼は「腰に帯して」
(十七節)生死をかけた斗いに立ち上がらねばならないでありま
しょう。しかし、神は、彼を一人には捨ておかれず、「恐れるな、
わたしが君とともにあつて、君を救おう」(八節)といわれるので
あります。

エレミヤは、この八節の言葉の意味するところを生涯を通じて
学んでいったのであります。彼の生涯は、神と民の間で、また人
間エレミヤと予言者エレミヤとの間で、双方から激しく迫られ、
引き裂かれ、もみつぶされて、逃げ場を失い、ついに神にかちと
られてゆくところの、悲修にして、しかし又、人の思いを絶した
慰め深いものであります。

(6)このようにしてエレミヤは、「万国の予言者」として立てら
れたのであります。「見よ、わたしは今日君を、多くの国民と王
国の上に任職した、あるいは壊し、あるいは抜き、あるいは建
て、あるいは植えさせよう」と(十節)。エレミヤの祖国ユダの運
命は、アッシリア、バビロニア、エジプトらの大国をはじめ、近
隣の諸々の小国の命運と密接不離の関係にあつたが故に、そして

更に根源的には、ヤハウエが全歴史を導き支配する主であるが故に、そのヤハウエによりユダに派遣されたエレミヤは、万国の命運をにぎる予言者たらざるをえないのであります。

(7)エレミヤは、二つの幻を通じ、ヤハウエが「目覚めてその言を實行しようとしている」(十一節) こと、つまり、ヤハウエは、北からの国々を用いて、背信と偶像崇拜にふけり、つまりは「己のが腹を神とせる」民に審判を降さんとしておられること、示されます。

(8)十八節にエレミヤに敵対して立つユダの各層が述べられています。即ち「ユダの王とその君侯達、その祭司とこの国の豪族達」(十八節)。王国時代のユダの社会層のうち、特権階級としては、(一)王とその周囲の騎士階級(ギッボーリーム)、王の役人(サーリーム)、(二)エルサレム在住の高貴な氏族及び大氏族の長老、(三)地方の農民的豪族(アムハーレッツ)、エルサレムに在住しない高貴な氏族の三つのカテゴリイがあつたといわれます(マックス、ヴェーバー「古代ユダヤ教」)。

このうち、一般に、(一)の社会層に属する有力者達と、(二)の地方豪族(アムハーレッツ)とは、予言活動に厳しく敵対しますが、エレミヤの場合も「ユダの王、その君侯達、豪族」が敵対しています。庶民層には、農民とゲーリーム(小家畜飼育者とレビ人、祭司)とがあり、エレミヤは、宗教的に有力な階層である祭司階級とも鋭く対立しなければならぬのでした。かくて、ユダのお

よそほとんどの有力者達がエレミヤの敵対者となるというのであります。臆病で内気で、争いを好まぬ若き青年エレミヤが、人間のみれば、どうして怖じ恐れずにいられましょうか。

ところが神は「その顔を恐れるな、さもないとわたしが君を彼らの面前であわてさせよう」(十七節) というのであります。誠に残酷な神であります。青年エレミヤは、かかる畏るべき神に、首根っこを押えられて、斗いの中へと無理矢理突っ込まされたのであります。しかし人間を恐れるとは何であるか。それは即ち「神を畏れることの欠如であり……ただ神を畏れることのみが、人間の前の不安を克服する」(ワイザー、前掲書十一頁)とは、ワイザーの至言であります。弱きエレミヤを支えるのは、もはや人間の力ではなくて、神御自身であります。

有力者の前で、神はエレミヤを「堅固なる町、鉄の柱、銅の城壁とする」(十八節)といわれます。

「彼らが君と争つても君には勝てない。わたしが君とともにあつて、君を救おう。」(十九節) 神御自身が弱き人と共にあつて、彼の斗いを斗われるのです。「器は物の数ならぬ土である。けれども、盛られるは比ひなき宝玉」(藤井、前掲書二四六頁)であります。

エレミヤは、召命即ち「聖別」において、「卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえる」(コリント後書十五章四二節)とこの創造と新生を

経験したのであり、パウロと共に「主はいわれた『わたしの力は弱いところに完全にあらわれる……。』それだから、キリストの力が私に宿るよりに、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。……なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」(コリント後書、十二章九節以下)ということのエレミヤは生涯をかけて学んでいたのであります。

(9)ある哲学者は、「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか」(森有正、「バビロンの流れのほとりにて」一頁)と述べていますが、エレミヤの召命における、微妙な意味での神への抵抗、神の断固たる服従の要求、神にかちとられて、全く新しい使命へと強制され、その歩みの中で神共にありと知らされ、それを受けいれてゆくといった、一連の経験は、誠に、彼の全生涯の本質を、残りなく映し出しているように思われます。

紫陽花

松本文助

三年前、園庭の整地の為少しばかり土方のまね事をした処、足の動作が重くなった。然し之は筋肉の疲れの為とばかりおもい込んでいたがなかなか回復しなかった。整形外科の診察を受けた別に骨節には異状がなく軽い神経痛の一種だと言う事で通院して治療を受けていた。

昨年の八月頃になって手と足の指間に水虫の様な症状が出来たので皮膚科の診察を受けた。検査の結果は水虫ではなかったが、検査やその結果を見る為に一時整形外科を休み皮膚科の治療を受けた。処が両科の注射に依って副作用が生じ、体中真赤になり熱や痒味の為一時は睡眠が出来ず、また口中も腫れて食事にも困った。

たまたま例年の横川鉞泉の研修会に出席した娘が私の欠席を申した為、兄弟姉妹の各位に大変心配をお掛けしてしまった。

皮膚科の先生の言われるには、神経痛の注射に含まれた金が吹き出た為であるとの事であった。

耳は聾し視力もかすみ健忘症のはなはだしい七十七の老骨の足の腰の屈折の不自由は当然の事で之を医薬に依って直そうとする自分の愚かさを自嘲する様な訳である。

園庭も、三月末の梅の花にはじまり、桜花、藤の花、つゞじの花と相ついで咲き競い散つていった。今は青葉若葉の色が濃い。そして紫陽花のみが桓根のきわに咲いている。もう夏になったのだとおもいながら、なにげなく「草は枯れ、花は散る。しかし主の言葉はとこしえに残る。」の聖句が浮かんだ。雨が止んで日がさしてきた。青葉が一段と輝きを増した。

確かに太陽の光の下では、生とし生けるもの総ては枯死する。

然し人には太陽の光の外に神の光を頂いているのだ。人には死がない永生が約束されているのであると意気込んだのである。そうすると、キリストに救われたと言う事が如何に大きな幸いであるかと、この喜びに浸っているこの頃である。これは偏えに皆様からの御心配と御加禱を頂いた賜物であると紙面を拝借して延引ながら御礼を申させて頂く次第です。

そうした今私は永生について、この喜びを与えられたその教えに付いて書き添えたい気持ちになったので左に抜粋する次第です。これは日曜集會に於てS兄のペテロ第一の手紙の研究御発表の時「靈魂」に付いて話された、内村鑑三の宗教座談の中に詳細が書かれてあるとの事であったので之を読んだ。その一節である。

『然らば私共の申す靈魂、即ち英語で申すソールと言うものは何でありましょうか。之は単に精神と言うものではありません。精神とはソールの精気で御座いまして其活動の力を謂うたもので

あると思ひます。其ように人の精神と申しますれば何も未来永劫にまで存在すると言う魂の事を言うのではなくして、主に其の活氣を指して申すのであると思ひます。

又靈魂とは心では御座いません。心とは靈魂の情を言う詞で御座います。或は又其の思考力を指して言う事も御座います。靈魂は感ずるもの、意うもので御座いますが、感情又は意思是靈魂其物では御座いません。

靈魂は勿論肉体の生命ではありません。若し爾うならば犬にも馬にも鶏にも鳥にも靈魂がある筈で御座います。外国ではこの區別が判然として居りまして肉体の生命の事を *anima* と申し (*animal* 動物なる詞の語源) 靈魂の事は前にも申した通りソールと申します。

爾うして見ますれば靈魂とは何であるかと言うに、精神でもなければ、感情でもなければ、意思でもなければ、又所謂生命でもありません。靈魂とは是等以上のもので御座いまして、他に其何たるを示す好い詞がありませんから、先づ之を自我と申しましょう。即ち靈魂とは肉体は勿論、凡ての感情、凡ての意思の主で御座います。之を英語では *individual* と申しまして、其意味は「分つべからざるもの」と言う事でありまして。言い換えて申せば人の本位でありまして、「私」と言い、「貴下」と言うは私の靈魂又は貴下の靈魂を指して言うので御座います。私の肉体も生命も私の靈魂の所有品でありまして、私は之を私の君の為か、或は

私の国の為に献げる事が出来ます。然し私は私の靈魂を私より放す事は出来ません。私の靈魂の在る所に必ず私は在るので御座います。私共は何と別るゝ事あるも、私共の靈魂と別るゝ事は出来ません。「如何にして我が靈魂を救われん乎」、此の号叫の声なくては到底基督教は解るものではありません。基督教は或人が謂う仏教のような哲学の一種では御座いません。又は禪宗のような胆力鍛練の為の工風でもありません。基督教とは靈魂を救わん為の神の大能で御座います。基督の降臨と言ひ十字架上の罪の贖と言ひ皆要するに靈魂を救わんが為の神の行為でありますれば、是等の出来事を靈魂以外の事柄に当てはめて其真義は少しも解らないので御座います。聖書にこう書いてあります。

イエス曰けるは我は生命(靈魂)のパンなり、我に就きたる者は餓ず我を信ずる者は恒に渴くことなし

我は天より降りし生けるパンなり、若し人このパンを食はじ窮なく生くべし、我與うるパンは我肉なり。

世の生命の為に我之を與えん。

(内村鑑三全集第一卷四一四「靈魂の本」より)

『後記』

- 長い梅雨が明けて、にわかに猛暑を迎えお変わりありませんか。
- 七二号を謹んでお届けします。
- 六月二日服部兄御一家交通事故、奇蹟的に急速に快癒し感謝はつきません。
- 日曜聖書集会は九月一日まで夏休み、八日第二日曜から幼稚園で、例月第四日曜は水戸南町商店会館で行います。
- 世はまさに百鬼昼行の感、御自重を祈ります。(半田)

夏期聖書集会のお知らせ

期日 八月十七日(土) 十五時〇〇分開会

八月十八日(日) 十二時〇〇分解散

場所 茨城県久慈郡里美村横川鉾泉中野屋旅館

会費 二千八百円程度(三食)

研究 マタイ二六章「イエスの受難」(二〇五六)

申込 松本文助(電水戸(二二)六〇八四)八月十日頃までに

水戸無教会 第七十二号
昭和四十九年七月発行

水戸市緑町三九一二六
水戸幼稚園内

発行人
編集人

松本文助
半田梅雄

(実費七十円 二十円)